

宮崎大好きっ子づくりをめざす



ひむかかるたを用いた教育活動をMRTが放送

10月21日MRT(宮崎放送)の番組「トコトン」で、ひむかかるた研究会の活動が15分に渡って取り上げられた。

コーナーでは大塚小・佐多修先生の取り組みをフィーチャー。先生が授業時間に行っているかるた当てクイズ(絵札の一部だけをプロジェクトで見せて、文言を当てさせる)の場面が映し出された他、夏休みの宿題として「ひむかかるたの旅」企画が取り上げられた。これは生徒たちが夏休み中にかるたの題材を実際に旅し、レポートを作成するもの。たとえば「マンゴーが、ぱとりと落ちた、網の中」を取り上げた生徒はマンゴーを食べた経験を、「自然が元気、地域が元気、みんな元気」では、生徒は高鍋のひまわり畑へ向い、そこで撮影した元気いっぱいの自分の写真をリポート。「にこにこと、豊作願う、田の神さあ」で「田の神さあ」をえびのに行って調べたことを生徒が発表すると、他の生徒が「すぐそばの生目もある!」と指摘。実は宮崎市内にもたくさん田の神さあがあることをみんなで発見した。これはいわばアクティブラーニング。教科書をただ暗記するのではなく、自分で調べて、確かめて発見する積極的でクリエイティブな学習だ。

番組は学校内だけでなく、家族内でもみんなで楽しんでいるシーンも紹介。ゲストとして宮崎市教育委員会の二見俊一教育長が出演。お気に入りの「芋焼酎、地鶏をつまみに、呑むじいちゃん」の札を披露しながらひむかかるたのすばらしさを語っていただいた。



研究会の取り組み

ひむかかるた協会には、その下部組織にひむかかるた研究会(会長・中武寿裕みやざき歴史文化館副館長)があります。今回は、この活動について紹介しましょう。

実は小学校の先生方にとつての悩みの一つが地域教育の指導方法。地域教育はふるさと宮崎のこと学んでもらうのがねらい。しかし、残念なことに生徒たちがなかなか関心を向けてくれないので、この解決策として研究会の先

生方が取り上げたのがひむかかるたでした。かるたは遊びです。しかし、ひむかかるたは「郷土かるた」。遊んでいくうちに自然と郷土の知識が身についていく。ここに目をつけたのです。事実、子どもたちはかるたに熱狂しました。ただし、かるた遊びには問題点も。かるたの「遊び」の部分にばかり関心が高い、なかなかふるさと宮崎のことを学んでくれないので、そこ

で、遊びながら地元を学んでもらえる方法を考えることにしました。

これまで開発されたものは①地域かるたの作成(小戸かるた)、②かるたの組み合わせの物語の作成、③役札の変更、④ひむかかるた弁当を作成(札にちなんだお弁当を

た大会のプロデュースといつた。ただし、かるた遊びには問題点も。かるたの「遊び」の部分にばかり関心が高い、な

どもたちがふるさとイメージを創造して「宮崎大好きっ子」になり、明日の宮崎を担う人材に育つともら

う点にあります。その可能性を議論する場

として11月25日、宮崎公立大学で宮崎市学術研究振興助成金シンポジウム「新しい郷土教育が開く宮崎の未来」と題したシンポジウムが開催されます。

ひむかかるた研究会としては、今後も郷土かるた、そしてかるたの教育への可能性の追究を続けていきます。新しい教育方法に関するある先生方の積極的な参加をお待ちしています。

子供と喜び共有

今回の交流戦では93人にも及ぶ多くの参加者が熱戦を繰り広げた。また、土曜日にも関わらず、子どもたちの勇姿を見ようと保護者も多数来場した。選手を見守る保護者の様子は、試合中の選手の周りで写真を撮ったり、真剣な表情で試合を見つめたり、時折対戦結果を見て頷いたりと様々。

交流戦は本大会に向けた練習試合のようなもの。初参加の保護者は、交流戦を通して初めて試合の雰囲気を知ることになった。「最初は交流戦の雰囲気に圧倒された」と語る保護者も。普段は家で興じているかるたの様子とは違うことを肌で感じたのではないか。

交流戦での結果をわが子と吉千佳

(宮崎公立大学4年・有

本大会まで、あと3ヶ月。選手たちの頑張りをこれからも見守つてもらいたい。

保護者も勇姿見守る



写真特集

